

令和3（2021）年1月23日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 徳吉 敬介 学生番号 G7D5062017

〈論文題名〉 言語間における緊張度の違いがアクセント生成に及ぼす影響
—日本人スペイン語学習者とスペイン人日本語学習者を対象に—

〈審査委員〉

主査	拓殖大学外国語学部教授	齋藤 純男
副査	拓殖大学外国語学部教授	安富 雄平
副査	拓殖大学名誉教授	木村 政康

I. 論文の主旨

本論文は、日本人スペイン語学習者におけるスペイン語のアクセント生成の置き換え、およびスペイン人日本語学習者における日本語のアクセント生成の置き換えに関して緊張・弛緩という概念を用いて論じたものである。両言語間に見いだされる母語干渉がどのようなものなのかについて言及し、また、母語干渉の問題を解決する方法として、VTS（言調聴覚論）の緊張・弛緩の概念を取り入れて、「～語らしさ」に向けた音声指導に新しい視点の提示を目指すのが狙いである。

日本人スペイン語学習者のスペイン語も、スペイン人日本語学習者の日本語も、発音については互いの母語話者に伝わりやすいとされている。アクセントに関して、スペイン語はストレス、日本語はピッチが弁別的であるが、両言語話者ともにスペイン語のアクセントの置かれた音節を長く発音するという類似点も認められる。しかしながら、母語話者がその生成音を聞くと違和感があるのも事実である。

研究調査はアクセントの生成に関するものである。日本人スペイン語学習者に対しては、アクセント位置の正誤および傾向、また、カタカナ語アクセント規則の影響を探るため、アクセント位置の指定がある CVC 構造のスペイン語を中心に読み上げを実施した。その結果、アクセント位置の置き換えは、母音の挿入、拍リズムへの変化、カタカナ語アクセント規則という 3 点が連関することで起きることがわかった。

日本人スペイン語学習者は、緩やかに長く発音する傾向が見られ、長母音の持つ音声的特徴と一致している。一方、スペイン人日本語学習者による日本語のアクセント生成の置き換えは、緊張過多によることがわかった。これは、両言語における弛緩開始のタイミング、弛緩の実現方法といった構造面の違いによって生じたものであると考えられる。

その理由として、スペイン人日本語学習者が母語話者に比べ、ピッチの変化量（高低差）が大きいこと、弛緩のタイミングが遅いこと、徐々にではなく急激に弛緩させるといった違いがあることが挙げられる。これらは、スペイン人に対して行った調査で見られたスペイン人のアクセント生成の傾向と類似している。いずれも弛緩が緊張へと変わることによって引き起こされた結果であり、こういった緊張度の異なりは、日本語らしい発音を歪める原因になる。

以上、本研究では、緊張・弛緩の概念を用いることで、両言語話者間における置き換えについての考察を容易にし、一見すると差異がないように思われる点も、ピッチの変化を通して、徐々に弛緩するのか、急激に弛緩するのかといった緊張・弛緩の構造から、両言語間における相違も明らかになった。緊張・弛緩の概念で両言語話者の学習言語における発音の置き換えについて論究した研究はなく、これまでにない新たな視点であり、本研究の独創的な点である。この成果を踏まえ、今後は、VTS の主張する緊張・弛緩の概念に基づく指導法を考案し、生理的側面を持つ身体リズム運動を科学的に解明していくことが課題となる。

II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第1章 序論

第2章 先行研究とその問題点

- 2.1 スペインにおける日本語教育
- 2.2 日西語のアクセントについて
- 2.3 音声上の置き換え
- 2.4 VTSの紹介
- 2.5 緊張・弛緩の概念
- 2.6 研究の意義

第3章 調査①

- 3.1 日本人母語話者における無意味語アクセント
- 3.2 調査概要
- 3.3 調査結果
- 3.4 考察
- 3.5 まとめ

第4章 調査②

- 4.1 日本人スペイン語学習者におけるアクセント生成の置き換え
- 4.2 調査概要
- 4.3 調査結果
- 4.4 考察
- 4.5 まとめ

第5章 調査③

- 5.1 スペイン人日本語学習者におけるカタカナ語のアクセント生成
- 5.2 調査概要
- 5.3 調査結果
 - 5.3.1 アクセント位置の置き換え
 - 5.3.2 アクセント生成における持続時間
 - 5.3.3 アクセント生成におけるピッチの変化
- 5.4 考察
- 5.5 まとめ

第6章 結論と今後の課題

- 6.1 全体のまとめ

6.2 結論

6.3 今後の課題

参考文献

謝辞

巻末資料

III. 本論文の概要

第1章 序論

本研究の目的、対象領域、ならびに構成について述べたものである。

日本人スペイン語学習者のスペイン語の発音も、スペイン人日本語学習者の日本語の発音も、それぞれの母語話者に伝わりやすい。アクセントに関してスペイン語はストレス、日本語はピッチが弁別的であると言われている。日本語母語話者が、“casa”をカタカナ表記した「カサ、カーサ」のように発音してもスペイン語母語話者には理解されやすく、また、スペイン語話者が「かさ（傘）」をスペイン語の“casa”で発音しても、日本語話者には理解されやすい。しかし、このような互いに理解できるというレベルの類似性が、両言語の音声教育に少なからずマイナスに働いているのではないかとしている。

本研究では、日本人スペイン語学習者のスペイン語、およびスペイン人日本語学習者の日本語の発音、特に、それぞれのアクセントに焦点を絞り、学習言語の発音における母語干渉がどのようなものなのかについて言及し、また「～語らしい」発音に必要な要素は何かをVTS（言調聴覚論）の原理を基に、緊張・弛緩という概念を用いて説明し、音声指導に向けた新しい視点の提示を目指すとしている。

第2章 先行研究とその問題点

先行研究を通して日本人スペイン語学習者およびスペイン人日本語学習者の発音における母語干渉の実態を考察し、本論文の位置づけを示したものである。

スペインにおける日本語教育は、発展途上の段階にあり、様々な課題があることが示される。音声に関しては、スペイン人日本語学習者の中に発音を重要視している者が多いことを明らかにした研究もある。発音は会話という相互行為を円滑に行うために重要な要素であるが、スペイン人日本語学習者を対象にした音声研究は極めて少ない。本研究は、こういった現状を理解したうえで、音声指導という視点から、現時点で起きている課題を概観している。

従来の研究では、スペイン人日本語学習者の日本語の発音に関する研究（母語干渉も含む）、また、日本人スペイン語学習者のスペイン語における母語干渉に関する研究はほとんど見当たらない。母語干渉の克服は、学習言語の音声を正しく生成することにもつながり、「～語らしさ」の習得をも意味する。

先行研究から見えることは、スペイン語と日本語のアクセントには、ストレスとピッチ

がそれぞれのアクセント構造を決定づけるという相違点があるものの、長さや位置などの類似点もあることである。日本人スペイン語学習者の中にスペイン語の発音を容易だと考える者がいることは、両言語の類似点が多いことを示唆するが、類似点は、一步間違えれば母語干渉の影響を受ける原因にもなることを指摘しており、こういった原因を探るためには、VTS 理論および緊張・弛緩の概念を用いる必要性があるとしている。

第3章 調査①

日本人スペイン語学習者に対して実施した調査の内容とその結果について述べたものである。

アクセント位置による正誤およびアクセント位置の傾向、カタカナ語アクセント規則の影響について、アクセント位置の指定がある CVC 構造のスペイン語を中心に読み上げ調査を行なっている。スペイン語学習者による音声生成では、挿入母音が拍リズムを誘発しやすく、スペイン語のアクセントとリズムが日本語のアクセントとリズムに置き換えられやすいこと、アクセントの位置が後ろから2～3音節目、カタカナ表記的な発音で後ろから3拍目に置かれる傾向があることが確認された。このことから、アクセント位置の置き換えは、母音の挿入、拍リズムへの変化、カタカナ語のアクセント規則という3点が連鎖することによって起きることが分かった。これは、日本語母語話者によるスペイン語音声の生成がいわゆるカタカナ発音の影響を受けていること、緊張から弛緩へといった変化という母語干渉の影響を受けているためであり、また、スペイン人日本語学習者のスペイン語のアクセント生成も、母語の音韻体系に依拠しており、母語干渉の原因について緊張・弛緩の概念で説明できるとしている。

第4章 調査②

第3章に続いて、日本人スペイン語学習者によるアクセント生成の傾向について述べたものである。

スペイン語学習者が両言語のアクセントに対して共通の音声的認識を有していれば、長音と強勢を弁別していないという仮説が成り立つ。スペイン語を発音する過程で日本語音声はどのように影響するのかを調査し、「スペイン語らしい」発音に近づかせるためにはどのような点が重要であるかについて検討した。

スペイン語母語話者の生成では、ピッチが強勢音節で急激に上昇するため急激な緊張を示していて、アクセント位置における音声的特徴の一つになっている。それに対し、日本人学習者の生成ではピッチが徐々に上昇していき、急激に緊張した状態にはならない。スペイン語母語話者と比較して持続時間が長く、弛緩した発音になっており、これが、日本人スペイン語学習者におけるスペイン語の発音の特徴の一つであるとしている。

日本人スペイン語学習者によるスペイン語のアクセント生成には、緊張から徐々に弛緩していく長母音の音声的特徴が現れている。緊張度から見れば、緊張した発音を弛緩へと変化させる音声上の置き換えが起きたとすることができる。緊張・弛緩の概念を用いるこ

とによって、一見、差異が見えにくい生成音も違いが明確になり、学習者のアクセント生成における置き換えの原因を説明しやすくなるとしている。

第5章 調査③

スペイン人日本語学習者の日本語アクセントの生成を対象に実施した調査について述べたものである。

スペイン人日本語学習者がアクセント位置で強勢と長音を弁別していないのではないかという仮説をもとに、母語の音声かどのように影響するか、日本語らしい発音に近づくためにはどのような点が重要であるか、について探ることを目的とし調査を行った。

スペイン人日本語学習者におけるアクセント生成は、拍数が増えるにつれて、母語話者に比べてピッチの変化量が大きいこと、全体的に急激に緊張・急激に弛緩すること、また、緊張が持続し弛緩のタイミングが遅れるといった構造面に置き換えが起きていることがわかった。これらは、第4章の調査結果に見るスペイン人のアクセント生成の傾向と類似しており、いずれも弛緩が緊張へと変わることによって引き起こされた結果である。調査①、②、③の結果から見ると、アクセント生成の置き換えは言語間における緊張度の違いによるところが大きく、本論文の正当性を裏付ける重要な要素になるとしている。

第6章 結論と今後の課題

本論文の結論として、研究の成果を以下の4点にまとめるとともに、今後の課題について述べている。

- (1) 両言語学習者のアクセント位置の置き換えは共通の音声的認識による影響であることが認められた。
- (2) 両言語学習者の音声の長さに注目し、緊張・弛緩という概念を用いることによって、置き換えの原因に対する説明を行うことができた。
- (3) 両言語話者間におけるピッチ量の相違を緊張・弛緩の概念で考察したことで、両言語話者の特徴を捉えることができた。
- (4) ピッチの変化を通して、徐々に弛緩するのか、急激に弛緩するのかという緊張の構造から、両言語間における緊張度の相違を明らかにした。

緊張度の概念を研究に導入することで、両言語話者間における置き換えについての考察が比較的容易になり、また、一見すると差異がないように思われる点も、ピッチの変化を通して両者の言語間における緊張度に相違があることも明らかになった。両言語話者における学習言語の発音の置き換えに関して、緊張・弛緩の概念を用いて論究した点は、これまでにない成果であるとしている。

今後の課題としては、身体の筋肉と調音器官の筋肉の緊張度を対応させた身体リズム運動を発音指導法として有効に活用するためには、音声を身体で緊張として捉え、それに対応する身体の動きを体得しなければならない。更なる発展に向けて、調音器官と身体の筋肉の相互関係を科学的にも解明していくことが必要であるとしている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

学位申請者は、2015年3月、拓殖大学外国語学部スペイン語学科を卒業後、同年4月本学大学院言語教育研究科博士前期課程日本語教育学専攻に入学、2017年3月に修了、同年4月博士後期課程に入学、現在に至っている。修了に必要な単位10単位は既に取得済みであり、外国語検定試験（スペイン語）にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表会および『拓殖大学言語教育研究』、日本イスパニア学会、日本語教育学会、日本言調聴覚論学会などの学会発表など計9本となる。博士論文完成発表会は、2020年8月8日に実施された。博士論文は2020年10月3日に提出され、2020年10月23日言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。

論文の審査結果

審査委員による論文審査は、2020年12月18日、拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2021年1月11日に実施され、審議の結果「合格」と判定した。

V. 審査所見

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

本論は、日本人スペイン語学習者とスペイン人日本語学習者という両側面から日本語アクセントの特徴と生成の傾向を論じているのは、適切、且つ妥当である。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

本研究を進めるにあたり、拓殖大学図書館にて資料収集を行うとともに、上智大学中央図書館、国立国会図書館より資料を送付してもらっている。また、イスパニヤ学会、日本言調聴覚論学会の研究者からの助言を仰ぐなど、多くの情報を得て研究を進めたのは、適切、且つ妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

日本人スペイン語学習者、スペイン人日本語学習者に対して行った調査を、ネイティブチェックおよび音声分析ソフトによる音響学的手法で分析考察したのは、適切かつ妥当であると判断する。

4. 論旨の妥当性

日西両言語母語話者における日本語、スペイン語音声生成の問題点について、日本語教育、外国語教育、音響音声学の観点から考察し、迅速で即効性のある指導法が急務であると論旨は、妥当であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

文章表現、音響学の知識、音声分析などにやや不備が見られたが、論文自体の内容や評価を損なうものではなく、論文の最終提出までに加筆・修正することを求めた結果、学位申請者が了承したので、最終版において修正されるものと認めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

緊張・弛緩の観点から、スペイン人日本語学習者の日本語、日本人スペイン語学習者のスペイン語という両言語のアクセント生成について論究した研究は見当たらず、本研究が初の試みである。

これまでに積極的に学会・研究会で研究発表を行ってきただけでなく、教育面では、拓殖大学外国語の TA（スペイン語、日本語音声学、スペイン語音声学）をはじめ、青山国際教育学院（非常勤講師）、能達日本語学院（専任講師）にて日本語を教授している。また、2021年4月からは専修大学（非常勤講師）にてスペイン語を教授する予定である。

このように、学位申請者は、両言語を教授できる能力および学識を備えており、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していくことができるものと認める。

VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。